

私が教育実習を経て授業について学んだことは大きく分けて3つあります。

まず1つ目は、発問をより効果的に行うための工夫についてです。私の母校は学力帯で言えば中間ぐらいで、まじめな生徒が多く、切り替えがちゃんとできる、苦手な教科でも必死に授業を聞いて頑張ろうとする生徒が多いのが特徴です。その生徒たちが授業で行う問いかけでどのように感じて、その後どのように活動するのかを想定した問いかけを行うようにしないといけないと感じました。例えば、質問する際に、既習事項である旨を伝えと、生徒たちは「わかって当然なんか」「昔やったことを繰り返しているだけなのか」と感じて、今やっている問題が難しい問題だと感じなくなると担当教員の先生に教えていただきました。この例のように、生徒に分かった気にさせることも数学という、苦手な生徒が多い教科で生徒に諦めさせない工夫として大切だなと感じました。

2つ目は、丁寧な授業と分かりやすい授業は全く異なるということです。丁寧に授業するとは、教科書通りに導出をして、生徒の反応を見ながら解説をどんどん分かりやすくなるように変えていく授業だと思います。しかし、私が教育実習を行った高校の、数学が苦手な生徒が多いクラスでその授業を行うと生徒たちはきっと置いてきぼりになってしまいます。なので、特に学んだこととしては、生徒観を重視して授業を作るということです。そのクラスが、全体的にどんな雰囲気、学力帯なのかをしっかりと把握して目標設定から工夫して授業を考えることで、はっきりと生徒に伝えないといけないこと、余裕があれば伝えること、伝えない方がいいことを分けて授業を行うことができるようになります。その工夫から分かりやすい授業に近づいていくと実習を経て思いました。

3つ目は、様々な力をさらに求められる環境だなと思いました。授業をより豊かにするためには、他単元や他教科との繋がりや、身近に起こっているニュースや学校で起こっていることなど様々な話をすることが大切だと感じました。50分授業で50分間集中できるクラスであれば50分間数学の話だけを、話すことが大切だと思います。しかし、50分間集中できない生徒がほとんどのクラスでは、いろんな話をして、数学のことはもちろん様々な知識や情報を生徒に伝えることが大切だと思います。

今回の教育実習では授業以外の場面でも様々なことを学びました。

例えば、生徒との関わり方についてです。実習ではクラスのホームルームや総合的な探求の時間などの教科指導以外の場面をたくさん経験しました。生徒から良い印象を持ってもらうためには、生徒の目線に合わせながらも教師として接することがとても難しいなと感じました。私は教育実習生で、大学生であることが生徒に伝わっていたので、生徒は少し話しかけやすくなっているなと感じました。でも、現場の先生方の中には生徒との距離感というものを、生徒にゆだねている先生もいました。しかし、私が教員になったら生徒との距離感をしっかり見計らってよい関係を主体的に築けるような教員になろうと思えた教育実習でした。